

ユカギール人 (下)⁽¹⁾

—— W. ヨヘリソンのユカギール民族誌より ——

From Waldemar Jochelson's Yukaghir Ethnography (2)
— An Annotated Japanese Translation of a Chapter —

遠 藤 史
Endo, Fubito

神経症（承前） —ここで、極北ヒステリーの2、3の患者の事例をあげてみることにしよう。ヤクーツク州をはじめて訪ねたとき、不愉快なことであるが、最初の頃何軒かの家（ユルタ）で、ヤクート人の老女が、ロシア語を知らないのに、私が同行者に言うことをくずれた言葉で、からかうように繰り返してくるのに出くわした。隅にだらしと座り込んでいる老女に私がびっくりして目をやると、彼女は落ち着かず困惑した様子になり “E, tox da mox!” 「気にするな」と言ったのである。他の家族は「気にとめるな。omūra'x だ」と言った。

視覚による自己暗示は、しかめ面や体の奇異な動作のように目立つことなら何でも真似することに現れる。この種の現象に含まれるのがユカギール人の示す舞踏性躁状態であるが、これについては社会生活の章で詳しく記述しよう。ユカギール人は一般に陽気な人々であり、楽しいことを好む。しかしいったん若者たちが踊りだすと、次々に一老人も子どもも、健康な者も病人も、特に老女が一それに加わり始め、やがて村の住民全員が踊りに集まってくる。ある病

(1) [訳者注] 本篇は民族学者 Waldemar Jochelson によるユカギール民族誌 *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus, The Jesup North Pacific Expedition, Memoir of the American Museum of Natural History, Volume IX*, Leiden: E.J.Brill, 1926 の第2章 (“The Yukaghir Tribe”, pp.16–47) の翻訳である。本篇は翻訳の後半部分で、本文の34ページ26行目から終わりまでを対象とする。翻訳の前半部分はすでに発表されている（「ユカギール人（上）」『経済理論』第352号, pp.169–193, 2009年11月）。

気の老女は起き上がることもできなかったのに、踊る若者たちを見て興奮したあげく、起き上がって踊り手の動きを次々に真似し始めた。やがて彼女は疲れきって倒れてしまったのである。

若者たちはしばしば、顔をしかめてみせたり、ある種の姿勢を取ったり、あるいは滑稽な単語や下品な言葉を叫んで真似させようと仕向けたりして、ヒステリー患者をからかう。特にロシア人(コサック兵や商人たち)は、彼らの家(ユルタ)に立ち寄った際、ヒステリーに陥った現地人を好んでからかう。性器を露わにするなどの卑猥なことをヒステリー患者にさせ、暗示にかけて虐待するようなならず者がいることを、私は既にコリヤーク人についての研究の中で述べた。

極北ヒステリーに罹った患者はまた、命令による暗示にかかりやすい。あるヒステリーの女性は、ある若者に命じられるままに馬の尾をつかみ、そのまま引きずられたということである。命令した当の若者が急いで尾から手を離すよう彼女に命じなかったら、彼女の身体はばらばらになっていたであろう。

北極圏にいる間に私自身が観察した2、3の事例をここであげておいてもよいだろう。

ヤサーチナ川沿い、ネレムナ川の河口にあるユカギール人の村には、聴覚や視覚による暗示に極端にかかりやすい何人かの女性—特に一人の老女—がいた。村人が漁労を行っている時期に私はその村にいた。その老女は網から魚をはずして川の土手に投げる作業に参加していた。私の知っているコサック兵の若者コテルニコフが不意に、その老女がいる場所の近くの網に近づき、ばたばたしている大きな鮭の尾をくわえて、川の土手に駆け上がった。驚いたことにその老女は、ふだんはやっと脚を引きずることができるくらいなのに、同じ動作をした。つまり、魚をくわえて、急な土手の斜面をものともせず、茂みや不安定な石の上を、若者を追って走ったのである。コサック兵が土手から川に駆け下りてくると老女もそれを追った。しかしコサック兵が川のそばで停止したのに、老女は川の中に突っ込んでしまった。すぐに皆に止められなかったら、

彼女は深い川の中で溺れ死んだかもしれない。そのときはじめて老女は、尾の部分にくわえていた魚を口から離し、激しく息をつきながら、砂利の上に疲れきって倒れたのである。走っている間、固く食いしばった歯の間から、老女が Niadude!（もう十分だ）と何度も繰り返したことにここで注意しておこう。彼女は自分がコサック兵の動作を真似るべきでないことには十分気づいていたのだが、自らの意志で暗示の力に打ち勝つことはできなかったのである。彼女はこのコサック兵にその酷い冗談をやめてくれるよう頼むだけだった。私はそのような試みを彼がその後行うことを禁じた。

ここで付け加えておくべきであろうが、写真を撮ろうとして私がこの老女をスクリーンガラスの近くに据え、じっとしたまま写真機の一番上の部分を見つめるように彼女に言ったとき、彼女の顔はこわばったようになり、眼は静止した。その状態が発作に至ることを恐れ、私は急いで彼女に立ち上がるように言った。彼女はただちに立ち上がって逃げ去った。

これと同じくらい興味深い同様の事例を目撃したこともある。それは冬、ヴェルフネコリムスクから北に約 45 マイル行ったヤクート人の村ロドシェヴォのことだった。私が滞在していた家（ユルタ）の近くにヤクート人が立っていたのだが、その中の 45 歳から 50 歳くらいのこの家の女主人が極北ヒステリーに罹っていたのである。突然 1 人のヤクート人の若者が雪に覆われた野原の方に走り出し、雪を中に入れるふりをしながらズボンを緩めはじめた。このヤクート人女性はすぐ若者の後を追い、ズボンの中に雪を詰めた。そこで彼女は冷たさを感じた；体についた雪が解けはじめ、いたずらな若者が逃げ去ってしまうと、彼女は急いで家に戻ってナイフを引っ掴み、彼女を困らせた若者を探しにかかった。若者は何とか隠れおおせたのであるが。

この女性に関して私自身が観察した事例をもう 2 つ述べておこう。彼女は私にヤクートの民話を話してくれたことがあり、私は通訳を通じてそれをロシア語に翻訳した。この民話は下品な性質のものであって、この女性は話の中に女性器のことが出てくると、彼女自身のものを指差した。もっともそのことで家

の中の者に笑いを引き起こすたび、彼女の成人した息子は顔を赤らめ、そんなことをしないでくれと頼んだ。この場合、彼女の語る民話自身が催眠術のような暗示の作用をしていたわけである。

また別のとき、私は引き裂いた手紙を火の中に投げ入れた。この女性はすぐに暖炉に向かって走って行き、その紙を救うために火の中に手を突っ込んだ。紙が燃えて灰になってしまうと、彼女は燃えかすや残り火をつかんだ。手を火傷しないよう、彼女は火から無理やり引き離された。私は彼女がわずかな火傷しかしなかったことに驚いた。彼女の愚かな行動は、極地の北東シベリアでは貴重なものである紙を救わなければならない、彼女の頭の中に生じた考えによって引き起こされた。しかし私は紙を意図的に火の中に投げ入れたのだし、彼女もその紙がすでに燃えているのを見ていた。

極北ヒステリーの症例では、患者の行動が外部から与えられた暗示の結果であり、病んだ意志がそれに抗することができないということを患者が意識しているので、彼らに暗示を与えてくる人々に患者は腹を立て、彼らの中に意図された悪意を見る。しかし、患者をそのようにさせるのは暗示を与えた本人ではないのである。

暗示を受けた瞬間、患者の脳はそれぞれ独立した2つの方向に動いているように思われる—自動的あるいは反射的に、そして高次の中枢では意識的に。反射的な側は統制なく指示に従う。意識的な側は、抑圧され、自動的な行動に逆らう力はないにもかかわらず、催眠術師と思われる者と争うことはできる。たいていは、精神の意識的な側の抵抗は反射的行動の後に起こる。しかしその抵抗に力がありすぎると、まだ進行中の反射的行動を止めてしまうことも時々ある。しばしば患者は、その暗示が意図的なものであっても、あるいは非意図的なものであっても、ナイフ、斧、あるいは何か手近な武器を手にして暗示を与えた当人に詰め寄る。それゆえ、患者からの恨みの噴出を止める人が周囲にいない場合、患者に実験を試みるのはいくらか危険である。私はそのような場面を多く目撃したし、2、3の場合には私自身が患者の苛立ちの標的にされた。

そのときには患者の精神の意識的な部分が行動を統御することができたので、暴力には至らなかった。現地の人々の目には、私は大切な人物で、襲撃されたり殴られたりすることはないと思われていたのだ。ある場合には、私の写真機のシャッター音にびっくりして、あるユカギール女性が私にではなく、近くに立っていたコサック兵に詰め寄り、男性器の名称を叫びながら彼につかみかかったこともあった。彼女はつまり、彼女の恐怖の原因である私から、怒りを意識的に、侮辱されてもいいような人間に轉移させたに違いない。

かなりの程度まで、この抵抗の発現と力は患者の気質に依存している。口に魚をくわえて運び去ったさきほどの女性の場合、このもの静かで従順な女性は、その行動を暗示したコサック兵にいたずらをやめてくれと頼みただけだった。しばしば暗示を与えたその当人、特にそれを意図的に行った人間は、暗示と反対の命令を与えることによって犠牲者の憤怒から逃れようとする。私はたまたま、女性患者がナイフか斧をつかみ、無礼な相手に詰め寄ろうとしている場面を目撃した。しかし相手は静かに言ったのである。「おまえは何をしているんだ？ その斧を置け。」すると患者はその言葉を「お前は何かをしているんだ？ その斧を置け」と繰り返し、腕を下ろして斧を元の場所に戻した。

極北ヒステリーの発現の実例は、専門家にとっては興味深い研究の対象であろう。私はここではある意識の状態における暗示という仮説を立てて、私自身が観察した事例を説明しようと試みてきたにすぎない。

現地の人々が病気の症状と考えるもうひとつの極北ヒステリーの現れは、眠っている最中に歌うことだ。ユカギール人はこれを *yendo'jenut yax'tei*（眠りながら歌う）、ヤクート人は *kuturär*、ツングース人は *na'yani* と呼ぶ。この現象は主に男性で観察された。夜に最も憂鬱な気持ちになるのは、現地の人々の家やテントの中で、単調で陰気な即興歌によって目覚めさせられることであり、これは歌い手が起こされない限り何時間も続くのである。この無意識の心霊的な行動は、夢とは違って、記憶に一切痕跡が残らない。歌い手自身も目覚めたときには自分が歌っていたことも、何を歌っていたかも覚えていない。

極北ヒステリーに罹っている患者、特にヤクート人の女性の中には、うつ病にかかっている人もいる。このような患者は無気力であり、すべてのことに無関心である。彼らはほとんど食事を取らず、頭を垂れたまま一日中黙って座っている。しかしながら大多数の場合には、極北ヒステリーの患者は落ち着きがなく、よく話す。

ユカギール人で気が狂った人には、私は一度も出会ったことがない。しかしユカギール語の中には、ヒステリーの発作から真の精神病を区別する単語が存在する—*el-o'men*（「感覚がない」「理性がない」）がそれである。1900年の秋、かなりの割合の若者（主に少女たち）が、伝染するような性質の精神疾患に陥った。患者は野蛮な音声を発し、自分の服を引き裂き、髪をぼさぼさにかき乱した。彼らは川で溺れ死のうとし、ナイフや斧を求め、正気のユカギール人に止められると、逃げ出して高いカラマツの木に登り、その高い枝の上に一日中いたものである。ユカギール人たちはそれらの木から目を離さなかった。私はこの病気の流行から1年たってヤサーチナ川流域に着き、この病気のことをユカギール人の民話だけから知ったので、その直接の原因については何も示唆できない。しかしこの病気が、ユカギール人が以前に被った飢饉の結果として現れた可能性はある。同様の伝染性の病気がバラスによりカチン・タタール人の少女たちの間で観察されている⁽²⁾。

数え方と測り方—ユカギール人の数え方の体系は2つの原理に基づいているようだ—5進法と3進法である。まず、3という数が基本として考えられている。4 (*ye'lokun* および *ya'loxloi*) は3プラス1を意味する。6 (*malgi'yaloï*)⁽³⁾ は3の2倍を、7 (*purki'oi*) は一つ上（つまり3の2倍の上）を、8 (*malgi'yeloloi*)

(2) Pallas, Reise, III, p.62 を参照。

(3) [訳者注] 数詞の6の4文字目の音素は、原文ではgの下に点を打った記号が使われているが、本篇では印刷の都合上、gの上に点を打った記号を用いる。以下の同種の例についても同様。この音素の実現された音声の代表的なものは、訳者の調査に基づけば、有声の口蓋垂摩擦音 [ɣ] である。

は4の2倍(つまり「3プラス1」の2倍)を意味する。他方5 (i'ngan.boi) は, xa'nbo (「手のひら」「手首」「手」つまり5本の指)に関連している。

ユカギール語の文法スケッチを書いたとき、私はまだ「指」という単語とある種の数詞の語源との関連に気づいていなかった。しかしさらに言語資料を研究したことで、この関連を確かめることができた。まず ca'rxun⁽⁴⁾ は片方の手の指すべてを意味する；この単語の第2音節 xun は「指」という観念を表し、car は分けて考えると「何か」を意味する。ここで、i'rkin (1), a'taxun (2), ye'lokun (4) および ku'nel (10) について考察しよう。これらの数の中にはすべて、kin, xun, kun という音節が含まれており、これらは明らかに「指」を意味する。つまり i'rkin (母音調和の規則により u は i に変わる) は「1本の指」を意味するはずである；a'taxun (無声音 s の代わりに対応する継続音 x が現れている) は「2本の指」を、ye'lokun は「3本と1本の指」(つまり4)を意味するはずである。yaloi (3) は、すでに述べたように、数え方の体系の第2の基本である。kunel (10) は、kun と n•el に分けられるかもしれない。ここで n•e は「一緒に」を意味し、l は名詞の語尾であり、軟音 n• は n の後で脱落する。するとこの単語は(両方の手の)「全部の指」(つまり10)を意味する。xa'nbo (「手首」と inhaniboi (5) の中には、xun の代わりに xan あるいは han が含まれている。すでに inhan•bo の意味については述べておいた。ツンドラ方言を例にとれば、5 という数と(片方の手の)5本の指との関連は明らかである。この方言で5は i'ndalje であるが、čal'je は「手首」「手」を意味する。そして čal'je の最初の č が d に交替する。なぜなら⁽⁵⁾ d は、それを含む単語が他の単語と結びついていない限り語頭に立つことができないからである。たとえば čomo'dalje (ツンドラ方言では「ツァーリ」の意味)は「大きな手」を意味する。⁽⁶⁾

(4) Molo'je は「ミトン」を意味する；car'xun-molo'je は「手袋」(指つきのミトン)を意味する。

(5) Jochelson, Essay on the Yukaghir Grammar, (American Anthropologist, N.S., Vol. VII, p.385) を参照。コリマ方言では先頭の d の代わりに無声音 t が生じる。

すでに述べたとおり、10はユカギール語で ku'nel であるが、これは両手のすべての指のことを意味するにちがいない。残りの10の倍数は、10を掛け算して得られる。たとえば30は yan-ku'nel つまり3つの10である⁽⁷⁾。100についてはロシア語の sto が使われるが、ユカギール語の音声では語頭に2つの子音が許されないので icto'x と発音される。古い時代には ku'nel-ku'nel (つまり「10(個)の10」)という単語を使っていた。100を超えるとユカギール人は数えられないようだ。1000については、現在ユカギール人はロシア語の単語を使っているが、このような大きな数の概念をユカギール人はほとんど持つことがない。貨幣を数えるときユカギール人は、100ルーブルの代わりに cogi 「袋」という単語を使う。これはロシア語を翻訳した名残に違いない。エカテリーナ2世の治世以前には現在のロシアの貨幣は紙ではなく銅でできていて、その頃は100ルーブルを入れた袋は略して meshok (мешокъ) と呼ばれていたものからである。

ユカギール人は日付を覚えておくための記憶の助けとして、棒 (mo'ibe) につけた刻み目を使う。この方法で彼らはキリスト教の暦を作る。7つ目の刻み(つまり日曜日)は十字で示され、他の祝日も同様に示されている。

長さを測るには、指幅1つ、あるいは2つなどが使われる。手の幅、歩幅、指をいっぱい伸ばした広がりなども使われる。この最後のものは mie'nje と呼ばれる⁽⁸⁾。現在のところユカギール人はロシア語の arshin を長さの単位として理解している。

ユカギール人は距離を定義する正確な尺度を持っていない。midol という単語があり、これは1日の旅程の距離を示す。この単語は midoče 「遊牧のキャ

✓ (6) コリマ方言では、コリヤーク語やチュクチ語と同じく、ツァーリは Pugudaniye (「太陽の頭(かしら)」)と呼ばれる。Tiyk-Eyem も「太陽の頭」を意味する。ヤクート人はツァーリを Yraxtahy 「遠いところにいる男」と呼ぶ。

(7) ユカギール語の数詞の詳しい説明については、Jochelson, Essay on the Yukaghir Grammar, 前掲, pp.385-388 を参照。

(8) mienje という単語はロシア語の miera (ми́ра) である可能性が高い。

ンプ」から派生したものである。しかし midol が旅程で過ごした距離あるいは時間を意味するかどうかは分からない。ここでは距離は時間により定義されているのだろう。遊牧しているときはたいいてい、キャンプは朝撤収され、夜新しい場所に設営される。日中に移動した距離は midol と呼ばれるが、もし日が短かったり、キャンプが遅い時間に撤収されたり、早い時間に設営されたりしたら、midol は小さい。あるユカギール人が次のように midol の意味を説明してくれた。「私たちは朝出発する。足が疲れ、棒のようになって曲がらなくなったら、midol を達成したと言うのだ。」

ユカギール人には、ヤクート語から取った小さい midol もある。こちらは時間によって距離を定義している。薬缶で湯が沸くのにかかった時間の間に行くことができた距離を、ヤクート人は köss と呼ぶ。この単語は実は「薬缶」を意味する。もちろん馬に乗る人の köss と歩く人の köss は距離的に同じではないだろう。この「薬缶」は現在では大体 1 時間程度にあたり、そのあいだに馬に乗る人は 5 から 7 マイル進み、歩く人は 3 から 4 マイル進む。ユカギール人はこのヤクート人の köss の考えを取り入れ、lu'nguba ye'lel（「薬缶が沸く」）と呼ぶ。単なる lu'nguba ye'lel のほかに、yarxa'ye lu'nbugo ye'lel（「凍った（氷を入れた）薬缶が沸く」）もある。こちらの尺度は単に（水から）湯を沸かすよりも長い時間の間隔を表すのである。私の通訳であるドルガノフがロシア語で表現したところでは、つまり「大きな時間と小さな時間」（большой часть маленький часть）があるということである。Tā mo'dox jan lu'nbuga ye'elga は「薬缶が 3 つ続けて沸騰する間（つまり 3 時間）、そこに居ろ」を意味する。

当然ながら、薬缶の寸法や火の強さといった問題もここに生じる。つまりこれは、時間的にも距離的にも、非常に漠然とした尺度である。ユカギール人は「薬缶が沸く」距離をまた ya'xan midol（ヤクート人の midol）と呼ぶが、これは o'dun-midol「ユカギール人の midol」よりかなり短い。後者は実際、遊牧している間に、ある夜の宿営地から次の夜の宿営地までの移動距離を示す。

私がユカギール人と一緒に移動していた時、1 つの midol（つまり 1 日の旅）

は、旅の手段や道の状態によってトナカイ、犬あるいは馬のどれで移動しているか、あるいは地面が乾いているか湿地か、あるいは柔らかいか雪が積もっているか、7マイルから35マイルの間で変動したものである。ボートで旅をする場合には、川を上るか下るかによって違いが生じる。

時の区分—1年は、コリマ方言では *n•e'malgil* と呼ばれ、ツンドラ方言では *cu'kunmalhel* と呼ばれるが、両方とも「すべての関節」という意味である。ユカギール人は年をこのように呼ぶ、というのは彼らは月を関節 (*margil*) を使って数えるからである。1年は12の太陰暦の月に分かれる；この月と（天体の）月は同じ単語 *kini'je* と呼ばれる。1年のはじまりは私たちの暦ではおよそ7月に相当する夏の月から数える。この時期に昔のユカギール人は、春の間過ごしていた上流から、筏に乗って川を下り、産卵するために海から遡上してきた魚を獲ったものだった。関節を使って月を数えるやり方は次のようである：両手を握り、両手の指の第1関節の峰を合わせる。この合わせた箇所を7月と呼ぶ。右手の握った拳の第2関節の峰は8月である。（右手の）掌骨と指骨との間の関節は9月である。手首の関節は10月、肘の関節は11月、肩の関節は12月である。頭部と背骨の間の関節が1月、左手の肩の関節が2月、（左手の）肘の関節が3月、手首の関節が4月、指と掌の間の関節が5月である。そして左手の拳の第2関節の峰が6月である。

ユカギール語の月の名称は次の通りである：

第1の月—7月, *pu'gud-o'rje kini'je*（夏の真中の月）

第2の月—8月, *yuku'kuč'i'ye kini'je*（小さな蚊の月）蚊が現れる。

第3の月—9月, *a'nin kini'je*（魚の月）冬の蓄えのため漁を行う。

第4の月—10月, *o'nčien kini'je*（牡トナカイの月）野生トナカイの発情期。

第5の月—11月, *ča'xa* あるいは *n•ade kini'je*（秋の月）⁽⁹⁾

(9) 上で述べたように、ユカギール人の月は私たちの月と完全には一致しない。第1の月を私は7月に比べたが、これは実際には私たちの6月の半ばの新月から始まる。同様に *n•ade kini'je* は私たちの10月から始まる。

第6の月—12月, yo'tneyedatle kini'je（背骨の前の月）

第7の月—1月, yo'tneye kini'je（背骨の月）yo'tneye は山脈と脊椎（yō「頭」より）を表す。この月は上で見たように、第1頸椎によって示される。この月はまた čomo'xartli'je kini'je（大きな蝶の月）とも呼ばれる。

第8の月—2月, yuku'xartli'je kini'je（小さな蝶の月）

これら2つの冬の月と蝶との関係は少々奇妙なものであるが、ここでは夏の間に——一方はトナカイの皮膚に、他方は鼻孔に一卵を産みつける2種のウシアブの幼虫を意味している。冬の間にこの卵が幼虫に成長する。これらの名称で奇妙なのは、xartli'je という単語が「幼虫」でも「ウシアブ」でもなく、「蝶」を意味することである。ウシアブの幼虫は ko'je と呼ばれる。一方のウシアブ（*Tabanus tarandinus*, Slunin）は mo'lle と呼ばれ、他方（*OEdemagena tarandi*, Slunin）は to'din'jaha と呼ばれる⁽¹⁰⁾。これは、両方とも幼虫から成長するという、蝶とウシアブの関連性によって説明できるかもしれない。

第9の月—3月, ci'bučien kini'je

第10の月—4月, ču'oled-omni ci'lle-kini'je（昔の人の cille⁽¹²⁾の月）

第11の月—5月, poldiče-kini'je（葉の月）

第12の月—6月, kuči'en kini'je（蚊の月）蚊が現れる。

ユカギール人がすべて以上の月の名称を知っているわけではない（ロシア化したユカギール人は特に）。彼らがより頻繁に用いるのは時節あるいは季節の名称である。昔のユカギール人が、自らの太陰暦を太陽暦に適合させるために、ちょうどユダヤ人が1つの月を加えたように、何らかの調整を行ったかどうかを述べるのは困難である。私の質問に対してユカギール人から受けた答えによれば、この点が彼らの興味を引いたとは思えない。月は一般に、新月から次の

(10) 同シリーズの第7巻, Bogoras, *The Chukchee*, p.80 を参照。

(11) ユカギール語の名がこの2種のどちらを意味するかは定かでない。

(12) cille は、日中に解けた雪が夜に凍ってできる氷の表面のこと。これは4月にではじめる。

新月までの間のことであるが、そのような月が12あって1年の巡りを完成させるかどうかは彼らにとって問題ではない。必要な場合には、彼らは単に月の名前のいくつかを無視し、先に進んで数えていた。

ユカギール人は私たちよりも多くの季節を数える。彼らの季節は6つである。これらの季節の境目は、以前には決まった日付にほとんど対応していなかっただろう。1年が何日であるかについて彼らは考えを持っていない。洗礼を受けた現在では、ユカギール人はギリシア正教の祝日にしたがって季節を数える。次のような季節がある：

1. pu'ge (夏), 聖アクリナの日 (6月13日) から聖マリアの日 (9月8日) まで。
2. na'de (秋), 9月8日から聖ミカエルの日 (11月8日) まで。
3. čie'je (冬), 11月8日から聖マリアお清めの日 (2月2日) まで
4. po're (第1の春), 聖マリアお清めの日から聖ゲオルギウスの日 (4月23日) まで。
5. ci'lle あるいは ci'nle (第2の春), 4月23日から雪解けまで、一般には聖ニコラウスの日 (5月9日) まで。
6. co'njile (第3の春), 雪解けから聖アクリナの日まで。

ユカギール人には週という考えがなく、曜日名は持っていない。現在では彼らはロシア語の名称を使っている—voskresenye (воскресенье), ponedelnik (понедѣльникъ) など。しかし日曜日については、ユカギール語の名称, xo'ino'po'jexo (神の日, 聖なる日) がある。

昼間は po'jexo' (つまり「光」), 夜は e'mil' (つまり「闇」) と呼ばれる。1日の24時間は po'jexo'-e'mil' (「昼間と夜」) と呼ばれる。1年は n-e'morgil' のほかに雪 (puko'le, 「白い」と「雪」を意味する) によっても数えられる。たとえば彼らは、5歳になった子供について「5番目の雪に入った」と言う。

精神的特徴—現在の状況を考えてみれば、ロシア人と接触するに至る前のユカギール人の性格について判断するのは難しいだろう。耐え忍ばなくてはならなかった抑圧と暴力のもとで彼らが大きく変わったことに疑いはない。ユカギール人は、カムチャダル人に次いで、シベリアで最も臆病な民族である。彼らは役人やコサック兵の命令だけでなく、ロシア人商人の命令にも従う。しかしこのことは、ロシア人が行ってきた過酷な扱いによる恐れと臆病さだけのためではなく、ユカギール人自身に内在する性格であるもてなし好き、親切さ、社交性などのためでもある。これらの特徴は、彼らの伝説の中に物語られているように、彼らが戦場で勇敢、無慈悲であったということとまったく矛盾しない。民話によれば、彼らはツングース人を野獣のごとくに虐げた。ユカギール人は憤りの気持ちを長い間覚えてもいる。他方で彼らは、家を訪ねてきたものと食物を喜んで分け合う。魚の蓄えがある秋には、近隣の村々のヤクート人が徒歩や馬で彼らを訪ねてきて、彼らのところに何日も滞在し、蓄えを食べつくしてしまうことがときどきある；その結果、冬が近づく頃には、ユカギール人のところに食べ物は残っていないのである。

ユカギール人は正直で誠実である。彼らは約束したことをつねに守る。自らが引き受けた命令（たとえばボート作り）を何らかの理由で果たせないときは、彼らはロシア人やヤクート人の顧客が課すいかなる罰金にも同意する。たいていロシア人やヤクート人は100パーセントの罰金を課す。彼らはどれほど自分が借金を負うかを知らず、商人の言葉に従うのである。子どもたちは死んだ父親の借金を払い、義務を果たすことを自らの義務と考えている。ロシア人商人は、ユカギール人のこの正直さをあまりにも利用しすぎている。

ユカギール人はそのもてなしにおいて、ヤクート人がするように身分のある人とそうでない人を区別することはしない。客はすべて一つのテーブルにつくのである。

ロシア人による支配によってどれほど畏縮していようが、ユカギール人は今なお、ロシア人との関係において、自らの尊厳をどう守ればよいかを分かって

いる。彼らは自らの品位を下げることはしない。ヤクート人のように施しを請うようなことはしない。自らが食物を提供できないのなら、ユカギール人は見知らぬ人に食物を求めることはしない。彼らはとても傷つきやすい。彼らは侮蔑には耐えられないし、多大な侮辱であると彼らが考える殴打をととても恐れる。見知らぬ人に対しては、彼らは思いやりがあり、礼儀正しく、親切である。

ユカギール人は、見返りを求めない奉仕をロシア人に利用されていることに慣れているし、それ以上の価値のある返礼を要求する意図をもって贈り物が提供されることにも慣れている。それゆえ私が彼らの奉仕に対して支払いをしようとするとは驚いたし、最初は私の贈り物を疑いの眼差しで受け取った。あれやこれやの仕事に対してどれほどの金額が欲しいのかと私が尋ねると、彼らはいつもそれを私の判断に委ねた。ユカギール人と接していた間、私は彼らとの間にただ一つの誤解もなかった。逆に彼らは、私が彼らの奉仕を報酬なしで活用したと確信し、私のことを恩人とみなしてくれた。他方、私が彼らに食事をおごったり、食料を与えたりしたときは、彼らは感情を交えずにそれらを受け取った。彼らは私に何の施しも求めることなく、パン、砂糖、小麦粉などを、当然与えられるべきものとして受け取った。彼らの考え方によれば、「食料を持っている者は、持っていない者と分け合わなければならない」のである。彼らは感謝の気持ちを、「あなたは私たちの父です。それゆえあなたは私たちを養ってくださる」と言って表した。1901年にヤサーチナ川流域で本物の飢饉が起こりはじめたとき、ユカギール人たちは私に状況を説明するだけでよかった。私は頼まれることなしに援助を提供した。ユカギール人たちは、拒絶は無礼だと考えるという理由によってもまた、自らの願いを口にすることを避ける。生きている人間の石膏模型を取りたかったときにはいつでも、彼らは私の願いを拒まず、その目的のために座ってくれた。しかし大多数は、特に女性は、恐いからその作業に従事させないでくれと懇願した。神経質な人に対しては、私たちは石膏模型も取ることも、写真も取ることも差し控えざるを得なかった。

言語—ここで私はユカギール語の音声や文法構造について述べることはしない。研究者はこれらが私の「ユカギール語文法試論」においてある程度詳細に論じられていることを知っているであろう。⁽¹³⁾ここで私は、ユカギール語が形態論的に言って多くの点でウラル＝アルタイ諸語と異なっていることを指摘したい；この言語は他の古アジア諸語と多くの点を共有しており、アメリカの諸言語との間にもある程度の類似が見られる。しかしながら語彙の面では、ユカギール語の言語資料はシベリアの方言群・言語群とまだ十分に比較されておらず、それらの言語とどの程度のを共有しているかを判断することは難しい。ここでは、ユカギール人によって借用され、語彙資料中、比較的近年のものであると確認されたロシア語、ヤクート語、ツングース語の若干の単語については考慮しない。私はユカギール語および他の言語の固有の語幹要素の同一性についてだけ述べている；つまり、文法構造の違いにもかかわらず、これらの言語間で共通の起源から発したとすることができるような語幹要素の同一性について、ということである。そして、そのような同一性が確立されない限りは、ユカギール語は文法的にも語彙的にも、（系統的に）孤立した位置を占めていると言わざるを得ない。⁽¹⁴⁾

私がユカギール語の研究に取りかかる前、この言語は完全に消滅したという見方が広がっていた。このような見方を取った中にフォン・マイデル男爵がいて、彼はユカギール語のツンドラ方言をツングース語と誤認した。1892年にヤサーチナ川流域にユカギール人を訪ねたロシア人の役人の中のメリコフ氏は、コリマ地域からギシガ地域に向かう旅の途上、知事に宛てた報告の中で、このユカギール人たちは本来の言語を忘却してしまい、ラムート方言を使って

(13) Annals of the New York Academy of Sciences, Vol. XVI, Part II, March 1905 (supplement to the American Anthropologist, April-June, 1905 に再掲) を参照。

(14) [訳者注] この段落から見る限り、ヨヘリソン自身はユカギール語が系統的に孤立した言語であるという見方に傾いているように思える。一方、ユカギール語がウラル語族と系統的に同系であるという説が研究史の中で、Bouda, Collinder, Tailleux などによって繰り返して主張されてきたこともここで指摘しておいたほうがよいだろう。

いると述べている；しかし私の研究は、2つの独立した方言—コリマ方言とツンドラ方言—が存在することを完全に立証した。第1のもの（コリマ方言）はヤサーチナ川およびコルコドン川流域で、ユカギール人および共存するラムート人によって話されている。第2のもの（ツンドラ方言）は、コリマ川とインジギルカ川の間で、ユカギール人とユカギール化したツングース人によって話されている。私が1895-96年にはじめてオモロン川河口地域に住むユカギール人を訪ねたとき、そこのロシア化したユカギール人である第1オモロン氏族の中に固有の言語をまだ知っているものはほとんどいなかった。またオモロン川中流では第2オモロン氏族の半数がまだユカギール語を話していた。1902年にはオモロン川河口のユカギール語を話す人々はすべて死に絶えた；そして、痛ましいことであるが、第2オモロン氏族は1897年に、飢饉とその後の食人の結果、死に絶えてしまった⁽¹⁵⁾。

1897年の統計によれば、約9パーセントのユカギール人が固有の言語をまだ話しており、307人のツングース人がどちらかのユカギール語の方言を母語と考えている。これらはたいいていユカギール化したツングース人のベティル氏族（165人）であり、コリマ川の西方のツンドラに居住している。これらのツングース人が自らの伝統を保ちつつ、ヤクート州からコリマ川ツンドラに移動してきたにもかかわらず、彼らが“Mit-arū' o'dud-arū”「私たちのことばはユカギール語だ」と言い、“Mit o'dulñojeili”「私たちはオドゥルだ」と言うのは驚くべきことである。私がこのことをヤサーチナ川流域のユカギール人に話したとき、彼らはその主張に憤慨した。のちに通訳であるドルガノフを私がヤサーチナ川流域からツンドラに同行させたとき、彼はこの主張をめぐってユカギール化したツングース人たちと激しい口論をした。ツングース人たちはオドゥル（Oduł）ではないのだとドルガノフは主張した；しかしツングース人たちは彼に、ドルガノフはオドゥルではなく、コギメ（Kohime）だと答えた。はじめは、ドルガノフとツンドラのユカギールおよびツングース人は、お互いの言うこと

(15) pp.54, 55 を参照。

が理解できなかった。お互いの方言が非常に異なっていたからである。そこで彼らは、両者がよく知っているヤクート語かツングース語で会話をするしかなかった。やがて彼らの間には一種のユカギール語のジャーゴンができあがっていった。ドルガノフは自分の方言で話し、彼らも自分の方言で話した；しかし、一方のユカギール語の方言の音声や語彙要素が他方のものとはいくらか異なっていたにも関わらず、彼らはお互いに理解するすべを学んだのである。

インジギルカ川とヤナ川の間に住んでいるユカギール人は、ツングース語を取り入れてツングース化した；しかし彼らの話すツングース語の中には、いくらかのユカギール語の単語が保持されている。さらに、川の名、湖の名、他の地名などが、以前はその地においてユカギール語が優勢であったことを証言している。ここのツングース語がそこに住むロシア人によって「ユカギール語」と呼ばれ続け、コリマ川とアラゼヤ川の間で話されるユカギール語のツンドラ方言が逆にツングース語と取られるのは奇妙なことである。このことから、方言の定義に関しては、広く行き渡った分類に依存することは無理だと分かる。上で述べたフォン・マイデル男爵とメリコフの両者は明らかに、彼らに同行したコサック兵の与えた定義に従ったのであろう。一方、インジギルカ川西側に派遣された 1897 年の統計の調査員は、ユカギール人の口語がユカギール語であってツングース語ではないことを示している。サンクト・ペテルブルクでこの統計資料を編集した S. パトカノフは不注意にも同じ誤りを繰り返したのであるが、⁽¹⁶⁾ 私のデータを知ってからは、彼の行った後の時期の研究でそれを修正している。⁽¹⁷⁾ ヤナ川の西側では、ユカギール人は第 2 の同化を被った。ツングース人に同化された後、彼らはツングース人とともにヤクート語を採用し、現在はヤクート語をもっぱら使っている。

ユカギール人が自分自身の言語とみなしている一方あるいは他方の言語のほ

(16) S. Patkanoff, *Essai d'une statistique et d'une géographie des peuples palaeasiatiques de la Sibirie*, St. Petersburg, 1903, p.42 を参照。

(17) S. Patkanoff, *Essay on the Geography, etc.* (本書 p.16, 脚注 2) , Part 2, p.176.

かに、彼らの大多数は隣り合った言語も理解する。たとえば、コルコドン川流域のユカギール人はユカギール語に加えてツングース語を、あるものはヤクート語を話す。ヤサーチナ川流域のユカギール人はユカギール語、ヤクート語、そしてたいていはツングース語を話す。ツンドラのユカギール人やツングース人は多言語使用者である。彼らはユカギール語、ツングース語、ヤクート語、そしてチュクチ語を理解する。インジギルカ川の西側では彼らはツングース語とヤクート語を話し、ヤナ川の西側ではヤクート語のみを話す。ロシア化したユカギール人は固有の言語を忘却してしまっているが、ロシア語のほかに、ヤクート語、ツングース語あるいはチュクチ語のような隣接諸民族の言語を話す。

外来の単語を取り入れるとき、ユカギール語は自らの音声や文法上の語形成の規則にしたがってそれらを同化する。たとえばロシア語の単語 *starukha* (*crapuxa* 「老婆」) や *sto* (*cro* 「100」) は、ユカギール語の単語の語頭に子音群が現れないことに配慮して、*teri'ke* と *ičto* に変わる。前者の場合、第1の子音 *s* が脱落する；後者の場合、母音が添加される。これらの単語にさらに改変が加えられ、ユカギール語の文法にしたがって、格語尾、動詞の接尾辞や接頭辞がつけられる。たとえば *teriken* は「老婆を持つ」(つまり「妻を持つ、結婚している」)⁽¹⁸⁾ を意味する。

ユカギール語が同化した外来の単語はたいてい、周囲の民族を通じてなじみになった物に関係する；たとえば、十字架、香、錫、銀などである。しかしまた、ユカギール人がはじめて出会って、自分たちで単語を作り出した多数の物もある。たとえば、アメリカの諸民族がヨーロッパ人を通じてそうしたように、ヤクート人を通じてはじめて馬を知った後、ユカギール人はこの動物をヤクート語の単語 *at* ではなく、*ya'xad-āče* (「ヤクート人のトナカイ」) と呼んだ。ロシア人の *ружье* (銃) を彼らは *kukud-eye* (「悪魔の弓」) と呼んだ。私のところではじめて見た写真機を彼らはこのように印象深いことばで呼んだのである：

(18) [訳者注] 名詞語幹 *terike* に(名詞語幹から動詞語幹を派生する)接尾辞 *-n* 「～を持つ」がついて形成されたのが動詞 *teriken* である。

yan no'incye ponxo ceulga coromod aibi todutelbon

3つ 脚を持つ 白い 石に 人の 影 描くもの

（「3本脚の白い石（＝ガラス）に人の影を描くもの」）、言い換えれば、「人の影をガラスに描く三脚」⁽¹⁹⁾。

【謝辞】 この翻訳を作成するにあたり、訳者の数回の現地調査の際、コリマ・ユカギール人の文化について詳しく、また親切に教えてくださったネレムノエ村の皆様方に感謝申し上げます。皆様のご教示がなかったら、この記述を深く理解することはできませんでした。また、この翻訳は以下の科学研究費補助金による研究の成果を一部使用しています：文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）[海外調査]「危機に瀕した古アジア諸語の系統的・類型的多様性に関する調査研究」（課題番号 19401020）、および同基盤研究（B）「北東アジア諸言語の統合性をめぐる類型的・歴史的比較研究」（課題番号 21401022）。

(19) [訳者注] このことばに示唆を受けた表題を持つ美しい写真集が出版されている：Laurel Kendall et al. (eds.) (1997), *Drawing Shadows to Stone: The Photography of the Jesup North Pacific Expedition, 1897–1902*. New York: American Museum of Natural History / Seattle & London: University of Washington Press. 副題に見るように、この写真集はヨヘリソンも参加した the Jesup North Pacific Expedition の残した膨大な写真コレクションの一部を収録したもので、ユカギール人を含むシベリアおよび北米の北方少数民族の今からおよそ1世紀前の姿を、鮮明な画像で記録にとどめている。